

# 2021年度 シンガポール魅力フォトコンテスト授賞式報告

Singapore Attractive Photo Contest Award Ceremony 2021 Report

南十字星編集委員会

去る1月8日(土)、2021年度 写真投稿年間大賞授賞式が日本人会さくらルーム(2F)にて行われました。キャノンシンガポールの山田様より大賞受賞をされた堀江晃子様へキャノンミラーレスカメラEOS M50 Mark IIが贈呈されました。

また、神田広報部理事よりシンガポールネイチャー部門賞を受賞された伊藤侏人様へ日本人会バウチャーが贈呈されました。残念ながら、シンガポール建物部門賞を受賞された櫻井建様とシンガポール組写真部門賞を受賞された浅井直之様は授賞式をご欠席されましたが、日本人会より日本人会バウチャーが贈呈されました。受賞者の皆様、本当におめでとうございます。そして、写真選考にも加わっていただき、大賞賞品をご協賛いただきましたキャノンシンガポール様に心より感謝申し上げます。



(左から) キャノンシンガポール 山田様、  
大賞受賞の堀江晃子様



(左から) 神田広報部理事、  
シンガポールネイチャー部門賞受賞の伊藤侏人様

## 喜びのお言葉

### シンガポール魅力フォトコンテスト大賞：堀江晃子様

この度は年間大賞を頂戴し、誠に光栄に存じます。私は全くの初心者であります。写真に興味を抱くようになったのは二人の女性の影響があります。一人はカメラマンの月野亜佐子さん(享年43歳)。亡くなる半年前、一緒に撮影旅行に行きました。闘病中にも関わらず被写体にカメラを向ける姿はとても力強く凛とされ、その美しい姿は今も忘れる事が出来ません。もう一人はこちらで出会ったカメラ好きの私の音楽の生徒さんです。ある日シンガポール風景の撮影散歩に誘ってくれました。最初は談笑しながらのんびり歩いていた彼女がカメラを構えた瞬間、可愛い小柄な彼女の雰囲気が一変しました。私は亜佐子さんを思い出しました。彼女達の覗いているレンズの向こう側にはどんな世界が広がっているのだろうか？私も写真を撮ってみたい！と強く思いました。写真を撮り終わりニコッとこちらを見る彼女の手にあるCanonのカメラ(Kiss X8i)がカッコ良くて眩しくて…それから見様見真似で撮り始め、こちらのフォトコンテストに毎月応募させて頂く事がいつの間にか今年の課題となっていました。踏み込んだばかりの写真の世界。これを機にきちんと学んで行こうと思います。(音楽と結びつけると頭に入りやすいようで、この写真は坂本龍一「青猫のトルソ」をイメージしてみました)

南十字星編集委員の皆様、Canonの皆様、このような素晴らしい機会を頂き、新たな写真の世界へ導いて下さった事を心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



作品名:「おやすみなさい」

### シンガポールネイチャー部門賞：伊藤侏人様

この度はシンガポールネイチャー部門賞にお選び頂き、ありがとうございます。このような非常に名誉のある賞を頂き、大変嬉しく思っております。

この写真は、自宅近くのHDBに、マスクを受け取りに行った時に撮った写真で、猫が仰向けに寝そべっていたので、これは面白い!と思い、シャッターを切りました。猫が仰向けになって寝るなんて珍しいな、と思い家に帰って調べてみると、よっぽど安心していないと猫が仰向けになって寝ることはないそうです。ローカルの人達に愛されている証拠ですね!

このような偶然の出会いはいつ訪れるか分からないものです。その出会いをしっかりと写真に収めるために、僕はできるだけカメラを日頃から持ち歩くように心がけています。

ですが、今の時代、あんなに小さなスマホでもオートで十分キレイな写真を撮ることが出来ます。しかし、僕が一眼カメラで写真を撮るのは別の理由があります。一眼カメラはスマホと違い、基本的にシャッタースピードやISO、絞り値と言われるものを自分で調節して、明るさ、ボケ感を自分の思った通りにコントロール出来ます。手軽ではないかもしれませんが、機械任せの写真より、自分で細かく設定をして写真を撮ったほうが、自分好みに仕上げる事が出来るので、僕は一眼カメラで写真を撮っています。

最後になりますが、南十字星関係者の皆様、キャノンの皆様に心より感謝申し上げます。この度は本当にありがとうございました。



作品名:「HDBのアイドル」



### シンガポール組写真部門賞：浅井直之様

僕らはこれまで疎まれこそすれ、表彰してもらうことなんて考えられもしなかったので、とても嬉しい。  
僕らは自分では移動できないので、人間に乗っかろうと決めた。そして、どうやったら人から人へ移れるかを考えた。  
人間はよくしゃべる。  
親と子や、友人どうしや、買い物先で、学校で、仕事先で、カフェでコピCを飲みながら、ホーカーで板麵を食べながら、マリナでビールを飲みながら、人間はいつでもしゃべっている。  
あっこれだ、口から出る細かいしぶぎに乗っかればどこへでも行けるということに、すぐ気が付いたんだ。  
このところ、「ウィズコロナ」と言ってもらえるようになった。だから、僕らはどうしたら人間に迷惑を掛けずに一緒にいられるかを考えている。なぜって、僕らは人間がいなくて生きていけないのだから。

この度は、私の写真を「シンガポール組写真部門賞」に選んでいただき、大変光栄に思います。マスクをしろと言われ、マスク越しにもごまご話すことになった結果、毎日どれほど喋っているかを感じることが多くなりました。そんなことを考えながらシンガポールを歩いていると、どうしてもお喋りしている人たちに目が行ってしまい、ふと気が付くと何枚かの写真がたまっていたので、組写真としてまとめてみたのが本作品です。なかなかスナップ写真を撮るのは難しいですが、愛機がしっかりとその一瞬を切り取ってくれました。

これを機会に、もっと彼を連れて街へ出て行こうと思います。南十字星の皆様、キャノンの皆様、有難うございました！



浅井直之様



作品名：「人間には、しゃべりたいことがいっぱいある」

### シンガポール建物部門賞：櫻井 建様

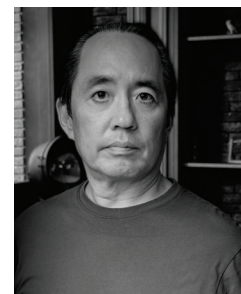
この度は、シンガポール建築部門賞を頂きありがとうございます。

南十字星に私の写真をご掲載頂いたことは本当に嬉しく、光栄に思っております。

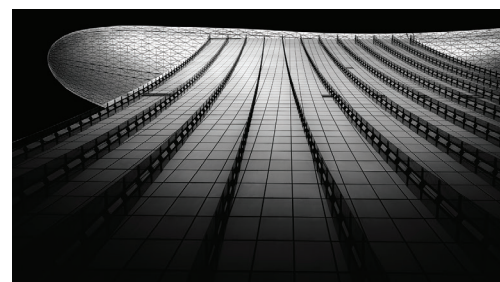
私が最初に写真に興味を持ったのは、1980年代。当時学生だった私は、Pentax Mシリーズのカメラでイルフォード白黒フィルムを用い撮影しておりました。暗室におけるセーフライトの赤い光の中、化学液を混ぜた合わせた皿の強烈な匂いは今でも忘れられず、そしてまた、現像液に浸した印画紙に画像が少しずつ現れてくる工程は、なんとも言えない不思議な体験でした。

以来写真から遠ざかっておりましたが、ここ数年また写真に興味を持ち、機会あるごとに撮影を重ねてきました。カメラ自体のテクノロジーが大きく進化していたこと、そして、「デジタルダークルーム」による、新たな表現の模索が可能となっていたのは大きな驚きでした。シンガポール生活では、様々な被写体にも恵まれています。特にシンガポールの建築においては、シビック・ディストリクトの植民地時代建築物から、1980年代丹下健三氏が手掛けたワンラッフルズプレイスタワー、さらにはシンガポールのニューアイコンとなったマリナベイサンズなど、想像力を掻き立てる建築物には尽きません。今回部門賞を頂くに至った「MBS」の写真は、通常とは異なる視点から建物を捉えてみようと思い、「デジタルダークルーム」にてトーンの調整を行いました。

シンガポール日本人会の皆様、南十字星関係者の皆様、キャノンシンガポールの皆様、この度は本当にありがとうございました。



櫻井 建様



作品名：「MBS」